

ユノは自分の顔が夕日で照らされていることに気付き、目を覚ました。

「もうこんな時間かあ。二人は先に武器屋でも見に行っただか」

ユノは独り言を溢しつつ、絡まった髪を手ぐしでほぐしていく。軽く整え終えると、ユノは外へ出ようとしたが、ふとルークが昼に言っていたことを思い出し、取っ手に掛けていた手をそっと戻した。

胸当ての金具を片手でちよいちよいと弄り、胸当てを外す。それを適当に寝具の上へ投げ置くと、上着の留め具を外していく。

「くっそ、ちいせえなあ…留め具なんか四つもやはり充分だろ」

文句を言いつつも上着を脱ぎ捨てると、鞆を漁って着替えを探し始めた。奥の方でくしゃくしゃになっっている普段着を引っ張り出すと、それを上から被る。

「おし、酒でも飲みに行くか！」

ユノは服のしわも気にしないまま、鼻歌交じりに宿を後にした。

夕方にもなると、家に帰る者、ミナートに留まるために準備をする者、夜にこそ商売をする者、それぞれが似たような場所に集まるため、大通りは随分と空いていた。

「さーて、酒場はどこだ？」

十字路の看板を見る中で、ユノは興味深い文言を見つけた。

「へえ、冒険者ギルドが運営する酒場か」

「お姉さんもそご気になります？」

ユノがまた独り言をつぶやいていると、冒険者の一団の隊長らしき人物がユノに声を掛けてきた。

「ああ、今日飲む所を探しててな」

ユノは朗らかに答えると、冒険者たちもそれにつられて声色を明るくする。

「その酒場、初めて行く人を連れていくと食事代が安くなるんですよ。もし良かったら一緒に行きませんか？」

冒険者の提案に、ユノは快諾する。

「そうなのか、じゃあついてくぜ！案内してくれよ」

賑やかな一団に混ざり、ユノは冒険者ギルドの建物が集まる区画へと向かった。

冒険者ギルドの本部の前まで来ると、冒険者たちでごった返していた。その様子を見て、ユノに話しかけた冒険者のトーペが口を開く。

「最近、本当に冒険者増えましたねえ…：：：依頼も取り合いいになっちゃって大変なんですよ」

ユノは依頼が貼り出された掲示板を眺める。討伐、納品、失せ物探し……その内容は多岐に渡っていた。そのうちのいくつか、やけに報酬が多い依頼が目についた。「なるほど、冒険者が増えてんのは金払いが良いヤツが居るからか。どれどれ……『ザディーナス』？」

ユノにはその依頼主の名に覚えがあったが、いまいち思い出せずにいた。

「ああ、それですね。『異界資源』……『異物』の納品だけでかなりの額をいただけるので、初心者たちが飛びついてるんですよ」

『異界資源』という言葉を目にして、ユノは記憶の端にあったものを引き取り出すことに成功した。

(聞いたことあると思ったら、兄貴が行ったところか)

ユノは頭の中が整理され、次の貼り紙を探して視線を移した。

「なあトーペ。人捜しの貼り紙ってどの辺だ？」

ユノの声色が変わったことに、一団はすぐに気づいた。団員たちは顔を見合わせつつ、トーペの返答に託した。

「人捜しですか、奥の方にあると思いますよ」

トーペは当たり障りのない言葉を選んで返す。ユノはそれを聞いて口角を上げた。

「お、そうか。ありがとな。ちよつくら見てくるわ」

ユノは駆け足で奥の方の掲示板に向かった。他に比べ、少し色あせた貼り紙がちらほらと貼られた掲示板を隅から隅までじっくりと見る。

「赤、黒、茶、黒、灰……うーん、無いか」

ユノは人捜しの貼り紙全てに目を通し終えると、また駆け足でトーペ達の元へ戻った。

「待たせたな、じゃあそろそろ酒場に行くか」

「……そうですね」

トーペ達はユノの身の上を案じつつ、ユノを酒場へと連れて行った。

「いや、勘違いさせちまったか、すまねえ。ハハハ」

ユノはトーペ達と食事を囲んで談笑していた。トーペ達も先ほどの思案が杞憂だったことに気付き、和やかさを取り戻していた。

「ユノさん本人じゃなくて、連れている子の貼り紙を探してたんですね」

「あんな悲しそうな声で『人捜しの貼り紙を探す』って言ったらねえ、そっちを想像しちゃうよオ」

団員たちは口々に安堵の声を漏らす。それを見てユノは更に笑う。

「オレが捜されるう？ ないない！」

「そんなことないですよオ、だってユノさん、人の目を惹くじゃないですか」

団員が投げかけた言葉に、ユノは目を丸くした。

「そうかあ？ オレの連れがそーゆーので悩んでるから、オレ自身のことはいんま考えたこともねえや」

「そーですかア？ なんかカリスマって感じですけど」
褒められてまんざらでもないユノは、照れて緩んだ口元に杯を運び、酒を呷る。ユノの上機嫌な顔を見て、トーペは少し乗り出す。

「目を惹くといえ、さっき面白いもの見たんですよ。ギルド本部から出てきた人が『青髪』がどうたらって言ってたんで、ユノさんが人捜しの紙を捜している間にちらっと珍しいもの見たさで覗きに行っただですよ」

ユノの手が止まる。先ほどとは違う、ついつい口がにやけてしまうのを、ユノは抑えることもせず聞く。

「ほーん、何だったんだ？」

しかしトーペはバツが悪そうに頭をボリボリと掻く。

「いやー、人だかりができて『青髪』は見えませんでしたね。でも、人だかりの中心から、冒険者ギルドが最近配り始めた『手引書』を読み上げてる声が聞こえたんですよ」

「あれ、声に出して読むもんじゃなっしょオ」

団員のツツコミに団員達は声を上げて笑う。ユノはそれにつられて笑うも、連れの心中を察してひっそりと憐れむのだった。

（事情はあるんだろうが、人に囲まれるたあ、かわいそうに）

泡の消えた酒は、舌に苦さをほんの少し残した。

「冒険者ギルドは俺たち平民のために作られたものなのに、なんで貴族が居るんだか」

そばかすの団員が、肉を噛み千切りながら悪態をつく。その言葉は近くに居た他の客にも聞こえたようで、押し黙る者、同じ表情を浮かべる者など、様々な様相を見せた。ユノは何か言っただけの場の雰囲気を取り戻そうとしたが、なかなか言葉が出てこない。

「そ、そういえば、最近魔物討伐の依頼が増えたでしょ、あれって西の方から魔物が来てるって噂があつて……」

ユノに目配せしながら、トーペが話題を切り替えた。

ユノはそれに乗るべく、やっとの思いで喉を震わせる。

「西って言うと、『竜域』の方だな。なんかあつたのか？」
ユノが話を広げようとしたのを確認したからか、トーペは身振り手振りを大きくして話を続けた。

「詳しくは何とも。竜域との境にあるボード村が魔物に襲われて、丁度そこに調査に来ていたザデーナスの調査員からの魔物討伐の依頼が貼られていたんですよ」

トーペの話はその場にいる多くの冒険者の耳に入り、情報通であることを誇示したがる者を集めた。

「それだけだよ、ザディーナスは竜城へ調査しに行くみたいだぜ、この前まで隣のウッドヴァインに居て内乱に巻き込まれたって話なのに、すごい胆力だよな」

「じゃあザディーナスが出した討伐依頼の報酬って結構弾むんじゃないか？ 『異物』の納品だけで銀貨数枚なら、金貨もあり得るぞ」

「でもザディーナスってこの国の組織じゃないだろ？ あいつらが言ってる『魔物』が竜だったらどうすんだよ」

「そんなときはそんなときだろ。『賢竜』以外はどうせ喋ったりできねえんだし、魔物と変わらないだろ」

ある冒険者の言葉に、蜥蜴人の男が掴みかかる。

「あ？ んな訳ないだろ、舐めてんのか」

「……じゃあお前とアオガネトカゲ、どう違うか言ってみろよ」

「ンだとテメェ……！」

二人の狙い通りに話題は変わったものの、その中で最悪の展開になってしまい、ユノと一団は喧嘩になった冒険者たちから逃げるように酒場を後にした。

「す、すみません、話題を変えたのになくなるなんて……」

トーペはユノに頭を下げる。しかしユノはこれを笑い飛ばした。

「いやーオレ、今日ツイてねえな、ハハハ」

トーペ達は呆気にとられたが、ユノにつられて表情を緩めた。ユノはユノで、トーペが自分の様子を何度もうかがっていることに対して頭を下げた。

「……ありがとなトーペ。氣イ遣わせちゃったし、また会えたら今度はオレが飯奢ってやるよ」

ユノがそう言うと、トーペは微笑んで答える。

「……そうですね、どこで会えるかもわかりませんが、冒険者ってそういうものですもんね」

そしてユノは一団と握手を交わし、一団と別れた。ユノはこのまま宿に戻ることも考えたが、回復した体力を使って、観光ついでに冒険者ギルド本部へと戻った。

本部へ入ると、ユノの予想通りの聞き慣れた声がつ、奥の方から聞こえてきた。

「……ギルド登録者以外と依頼を達成した場合、報酬はギルド登録者のみ支払われ、分配などに関する責任はギルド登録者に、帰属する……」

ギルドの手引書を読み上げるルークの声はすっかり疲れ切っていた。

「次は……ふああふ、今読んでもらったのが『報酬分配制度』でしたよね。えっと、次なんだっけ……」

ブランカはブランカで、言葉の中にも眠たげなあくびが混ざっていた。

そして、人ばかり。ユノがちらりと見る限り、新米冒険者未満といった姿ばかりであった。ルークの話すのを聞いて、うんうんと頷いたり、筆記具で線を引いたり、それはユノにとつて士官学校の授業を思い出させる光景だった。ユノは人ばかりを割るように進み、二人の元へとたどり着いた。

「よお、こんな遅くまで何やってんだ？」

ユノが声を掛けると、二人の疲れ切った顔がほんの少し明るさを取り戻す。

「ユノさん、元気になったみたいですね。良かったです……ふああ」

ブランカはニコニコしつつも、抑えきれなかったあくびが口から洩れる。ユノはその姿を見るや否や、ブランカの頭を撫でた。ブランカが笑みを溢すのをこれまた笑顔で見る。

「噂になってたから見に来たけどよ……冒険者登録か？いつでも辞められるんだし、さっさと登録しちゃえばいいのに」

「規則は把握しておくべきだろう。不利益を被るのは避けたい」

そう言っただけでルークは手引書をめくっていくが、指が滑って読みたい項を通り過ぎていく。ルークが手引書を持ち直す瞬間を狙って、ユノは手引書をひったくった。ル

ークは一瞬手を伸ばすが、立ち上がらないと手が届かないと判断し、手を引っ込めた。

「武器屋にも行ってきたんだろ？今日はさっさと登録して、帰って休もうぜ。申請書は……これか。ブランカ、これに名前書きな」

ユノはルークの筆記具をブランカに渡すも、ブランカはそれを握ったまま動かす気配は無かった。ユノは少しの間見守っていたが、やがてその意味に気付き、ルークの方を向くと、ルークはそれを首肯した。

「なるほど、読み書きか……盲点だったな。貸してみ」

ユノはブランカから先程渡した筆記具を受け取ると、手引書の空欄部分に『ブランカ』の綴りを書いて見せた。

「こうやって綴りを見ると、キレイな名前だな」

ブランカはユノの言葉に、「そうですか？」と純粹な疑問をぶつけつつ、何度も確認しながら「自分の名前」を書いた。

「……書きました！じゃあ受付の人に渡してきます」
ブランカがふらふらと受付に向かうのを、二人は座ったまま眺める。

「ブランカはこれで『冒険者』になるわけだけとさ、『研究対象』とか言ってたのはどうなったんだよ」

ユノはルークに話しかけるが、反応がない。ルークの方を見ると、彼は真剣な眼差しでブランカの背を見守っていた。

「おーい」

ユノがルークの視線を遮るように手を動かしてやっと気付いた。

「ん、ああ……すまない、お前の言う通り、疲れているみたいだ」

一通り喋ると、ルークはまた受付の方に視線を戻した。ユノも「だろ？」とだけ返し、同じようにブランカの様子を見届けた。

ブランカが何かを受け取って、パタパタと駆け戻ってきた。手には金属でできたブローチが、明かりに照らされてキラリと光っていた。

「見てください、『冒険者の証』ですって！ かつこいいですねえ、ふふ」

ブランカはそれをしばらく眺め、満足すると胸のあたりに留めた。

「似合いますか？」

笑顔で聞くブランカに、ユノは一番単純な言葉で答え

た。
「似合ってるぜ、ブランカ」

しかしどこかで、胸にささくれができたような、そんな心地であった。

〈十三話へ続く〉